

助教授から調査結果の報告があり、それらが狩野探幽および狩野尚信の筆になるもので、いずれもこれまで美術界で紹介されたことのない貴重なものであるとの判定がなされた。この判定にあたっては、日本美術史研究、中でも狩野派の研究を専門とする河野元昭東京大学教授に写真による判断を仰いだ。さらにその後調査を進める過程で田村直翁の屏風絵1双が見つかったため、河野教授に図書館から出張鑑定を依頼した。その結果これら3作品が真作であることがあらためて確認された。著名な画家による屏風絵の発見は近年きわめて稀なことであり、しかもこれまで美術界で紹介されたことのない作品が一挙に3点も新たに発掘されたことは注目すべきことである。

これらの屏風絵はこれまで貴重書庫に保管されてきたが、以前から表具の劣化が激しく、必ずしも良い状態で保存されていたとは言えない。各屏風ともそれを納める木箱がなく、薄紙をかけた程度の簡便な包装状態で置かれていた。これらの屏風絵は筑波大学の旧蔵品ということで、開学以来特に専門家に照会することもなく保管されてきたものである。

3双の屏風絵がどのような経緯で附属図書館に収蔵されるに至ったかについては、現時点では確定的なことは何も明らかになっていない。前身校

である東京教育大学当時の図書館職員の話によると、昭和18年以前、前身校の東京文理科大学の図書館に保管されていたものと思われる。それ以前には学長室に飾られていたともいわれているが、伝聞の域を出ない。江戸期の儒学者林羅山が狩野山雪に画かせた「歴聖大儒像」が古くから本学に伝えられていることから、湯島聖堂の学舎を受け継いだ本学の前身校である師範学校以来の収蔵品とも考えられる。本屏風絵が画かれた時代および林羅山と狩野探幽との関連から考えると、昌平覺伝来の資料の可能性もある。収蔵の経緯については専門家による今後の調査を待ちたい。

本学は明治5年の師範学校以来、東京師範学校、高等師範学校、東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学を経て筑波大学に至っているが、120余年の長きに渡り幾多の変遷を経て良くぞ保管されてきたという感がある。

江戸幕府は武士の教養の第一として儒学を奨励したが、その推進に力のあった林羅山、彼と親交のあった狩野探幽、今回判明した探幽・尚信による儒教的色彩の濃い屏風絵等のつながりを考えると、専門外の筆者でも気になることが少なくない。専門家にとっては興味の尽きない対象であろう。

(いたばし・しゅういち 附属図書館長)

話題になった探幽 「日本美術の名品」展閉幕

筑波大学芸術学系と附属図書館の共催による「日本美術の名品」と題する展示会が5月22日から6月9日まで開催され、学内はもとより近県や遠くは北海道、鹿児島県など全国各地から約4,300人もの来場者がありました。

この展示会は、狩野探幽・尚信、田村直翁の筆になる屏風の発見という劇的な出来事により、当初の企画から開催規模も内容も大きく様変わりし、関係者を奔走させることとなりましたが、多くの方々のご協力とご支援により好評のうちに3週間の会期を閉じることができました。

以下、展示会等の様子を報告しますが、展示された資料は筑波大学電子図書館 (<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/>) にて詳細な画像を提供していますので併せてご覧ください。

特設会場にて発表を行う北原学長、板橋館長ほか記者発表は4月20日に行われ、北原保雄学長らが、本学の前身である東京教育大学以前から保管されていた狩野探幽の屏風等を発見した経緯について発表し、全国の主要各紙に大きく報道されました。その後、展示会に向けてワーキンググルー

プも結成され、準備が急ピッチで進められました。(写真1)

特別展オープニングセレモニー

オープニングセレモニーでは、北原学長が「新しい大学に、古くからの伝統が生かされているさまを觀賞してほしい。」と、板橋館長が「この度発見された貴重な資料を、はじめて図書館が公開する意義。」などを語られ、引き続き、学長、館長、白木芸術学系長の3人によるテープカットが執り行われました。(写真2)

新出屏風 狩野尚信筆^{りはくかんぱく}「李白觀瀑^{せんけいほうたいず}、剡溪訪戴図」

探幽の弟であり、探幽とともに幕府の御用絵師として活躍した狩野尚信の作品です。画題は中国の故事によるものですが、右隻と左隻をよく見比べてみると、太陽と月、あるいは夏と冬といった対になる情景が描かれていることがわかります。(写真3)

新出屏風 狩野探幽筆「野外奏楽、猿曳図」

今回の新出屏風の新聞報道では、「探幽の屏風発見」と、この屏風を前面に出した見出しが数多く見受けられました。高名な画家の、しかもこれまで知られていなかった作品だけに、この屏風を目当てに来場された方も多かったようです。今回の特別展のシンボリック作品として、図録の表紙やポスターにも用いられました。(写真4)

狩野山雪筆^{れきせいたいじゆぞう}「歴聖大儒像」

本来21幅からなる作品で、現在は朱子等の宋代の儒者を描く6幅が本学に、残り15幅が東京国立博物館にあります。本図は、林羅山が絵を狩野山雪に、賛を朝鮮通信使の副使であった金世濂に依頼して完成したもので、湯島聖堂に伝来してきたことも含めて由緒正しい作品です。6幅すべてを^{せきてん}釈奠の際に掛けていた形で公開したのは、筑波大学としては今回が初めてのことでした。(写真5)

「大智度論^{だいちどろん}」と「瑜伽師地論^{ゆかしじろん}」

石山寺一切経の黒印を持つこの両巻は、ともに

天平時代のもので、「大智度論」は附属図書館で所蔵する最古の資料です。両巻とも随所に白訓点が付されていて国語学の資料としても貴重なものですが、肉眼では見にくかったこの白訓点も「大智度論」の高精細画像に画像処理をした結果、はっきりと見えるようになり、その成果の一部も展示しました。(写真6)

オンラインによる電子展示

展示会場ではオンラインによる高精細画像の電子展示も行われました。大型のプラズマディスプレイに映し出された映像は、原物では確認の難しい細部まで精妙な色彩や筆跡を再現し、多くの来場者の関心を集めました。(写真7)

案内や広報に一躍かった各種サイン

当初から多数の学外者の来場が見込まれ、展示会場への館内誘導サインの他に、バス停から図書館までの案内にも工夫がされました。また、入館ゲートの上に掲げられた看板と、バス停用に考案したサインスタンドが広報におおいに貢献しました。(写真8)

展示された資料一覧

- 1 大智度論 巻第70 1軸 天平6(734)年写
- 2 瑜伽師地論 巻第73 1巻1帖 天平16(744)年写
- 3 金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法^{こんごうちょうきょうゆかしゅうしゅうびるしやなさんましほう} 1巻1軸 延長8(930)年以前写
- 4 歴聖大儒像 6幅 寛永9(1632) 狩野山雪筆
- 5 「野外奏楽、猿曳図」屏風 6曲1双 江戸初期(1650-60頃) 狩野探幽筆
- 6 「李白觀瀑、剡溪訪戴図」屏風 6曲1双 江戸初期(1640-50頃) 狩野尚信筆
- 7 「架鷹図^{かようず}」押絵貼屏風 6曲1双 江戸前期・元禄(1688-1703頃) 田村直翁筆

(参考出品)

- 1 賢聖障子図(3枚/14枚)
 - 2 住吉物語絵巻(複製)
- (特別展示ワーキンググループ)



記者発表(写真1)



特別展オープニングセレモニー(写真2)



新出屏風「李白観瀑, 剡溪訪戴図」(写真3)



新出屏風に見入る観覧者(写真4)



「歴聖大儒像」狩野山雪筆(写真5)



「大智度論」と「瑜伽師地論」(写真6)



電子展示(写真7)



バス停のサイン(写真8)